2024年5月5日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

主の思いを食べていますか

［コリントの信徒への手紙一11章17～26節］

「次のことを指示するにあたって、わたしはあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。まず第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。わたしもある程度そういうことがあろうかと思います。あなたがたの間で、だれが適格者かはっきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれません。それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。わたしはあなたがたに何と言ったらよいのだろう。ほめることにしようか。この点については、ほめるわけにはいきません。

わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。 」

[1]　最初期の「主の晩餐」

 今日は、「コリントの信徒への手紙一」の中でも、特に「主の晩餐」についての記述がある11章の中から、私たちへの語りかけを聞いて行きたいと思います。皆さんご存じのように、「主の晩餐」の原型というのは、イエス・キリストが十字架にかかられる前日に行われた、いわゆる「最後の晩餐」ですよね。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネそれぞれが記している、主がご自分の12弟子を集めて開かれた食事です。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画でもよく知られていますよね。

　しかし、今日の箇所は、イエス様が地上の生涯を歩んでいたその時ではなく、その後、紀元1世紀にキリストの教会が誕生し、使徒パウロがその創設に関わったコリントの町にある信仰共同体の中で行われていた「主の晩餐」の食事のことが取り上げられています。パウロはこの異教の地であるコリントの町に教会が出来たということは大きな神の恵みだと神様に感謝している訳ですが、その交わりについてはどうも問題が色々あるということを聞かされて、それで牧会的な手紙を書き記している訳です。このコリント教会では、恐らく今の私たちよりは数多く「主の晩餐」を行っていたようですが、そのあり方や開き方について「あなたたちをほめるわけにはいきません」（17節、22節）とパウロはきつい口調で言っています。パウロは放っておけなかったのですね、彼にはこのままだと教会が教会ではなくなってしまうという危機感があったのだと思います。

[2] パウロは何を怒っているのか

 まず当時の「主の晩餐」のあり方についてみると、分かっていることと良く分かっていないこともあるのですが、これは、どうも現在の教会で行われているような独立した儀式として行われた訳ではないようです。普通に一緒の食事をしている間に、この主の晩餐も行ったということです。そして、当時のクリスチャンたちの集まりは、どうもこのような、どこどこ教会という場所があったという訳ではなく、個人の家で行われていたようです。当時の典型的な家の食堂には、食卓に着くために横たわる状態で9名しか入れず、後の者は中庭に座るか、立つしかなかったらしいです。中庭にはあと30人か40人の場所が提供されていたということです。また、このような集会の主催者は、共同体の豊かな会員でありました。そして食堂に招かれるのは高い地位にある人々であり、地位の低い教会員（解放奴隷や奴隷）は外の広い場所に位置していたと想定できるということです。更に、食事の内容も異なっていた。丁度飛行機でもファーストクラスの食事とエコノミークラスの食事が違うように、裕福な者と貧しい者は明らかな差異があったということです。私たちはそれを聞くと、そんなことが初期の教会で行われていたなんて差別じゃないかと思いますね。そう、差別なんです。しかし、当時のローマ世界（コリントはローマの植民地だった）ではこれが普通の事でした。だからパウロが20節で「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです」と言っても、ピンとこなかった可能性が高いと思います。パウロさん、何故そんなに怒っているの？と。彼らは21節で「食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末」であったとありますが、これは裕福な者が、遅れて食事に来るのを待たずに食べ切ってしまうというように考えるよりも、めいめいがそれぞれのものを当然のように食し、分かち合うことをしないので、貧しい者は貧しいままであり、集まることで却ってそれが際立ってしまうということのようです。パウロは、そうであれば、食事は自分の家で済ませて来なさいと言うのです。「それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか」と立腹していますね。あなたがたのそのあり方は、「神の教会」を見くびったやり方なのだとパウロは言っています。では、「神の教会」とは何を大事にする所なのか、ということです。

[3] 「主の晩餐」の制定

　ここでパウロは、自分の考えを主張するのではなく、主イエスが残して下さった「主の晩餐」の、語り伝えられてきたその制定文を思い起こすように23節以下に書き記します。これはほぼ共観福音書に記されている内容と同じであって、当時、既に伝えられていたことが分かる貴重な文書です。今日もこの後「主の晩餐」を行いますが、そこでもお読みします。私は、本当にこの言葉をよく聖書は残してくれたなぁ、と心から感謝したいと思います。これは、先ほど申しました当時の、当然とされていた差別構造に疑問符を投げかける決定的な言葉なのです。それはどういうことか。私はひと言で言うなら、「この世」の価値基準の中に、「永遠」の価値が入り込んで来たことだと思います。私たちはやがて死にます。生きている時は幸福でありたいと願います。そして、その幸福の保証は「経済力」や「地位」だと考えるかもしれない。しかし、本当にそうでしょうか？そうであれば、案外生まれつきの環境などで幸福であるかどうかが決まってしまいます。でも、そうじゃない。聖書は、私たちの人生を本当に幸いなものにしてくれるのは、お金じゃない、地位でもない、イエス・キリストがあなたのために死んで下さったということだ、と言うのです。それこそが、死ぬべき私たちに与えられている「永遠の価値」だと言うのです。

私は、イエス様は、何故「最後の晩餐」を開いて下さったのかなと思いました。もし最後の晩餐を開かずに、捕らえられて十字架刑を処せられて死んでしまったとしたら、何が違うでしょうか？この制定文は残されず、この主の言葉は残されないということになります。しかし主は、この最後の食卓を弟子たちを集めて行いたいと「切に」願っていたと福音書には書かれています。人間的には、どうしようもない弟子たちですよね。イエス様が翌日命をお献げになるなんて全く考えずに「誰が一番偉いのか」などと議論している。情けないですよ。そしてイエス様が「あなた方の内の一人が私を裏切ろうとしている」と言うと、「まさか私のことでは」と動揺し切っている。あのダ・ヴィンチの絵からも動揺が伝わってきますね。あの動揺って何なのか。イエス様のことを考えているというよりも、わたしじゃないでしょう？という自己保身じゃないですか。そして、実はそれが私たちなのではないでしょうか？それが、ここで顕わになっている。その中で主のこの言葉が残されている。そのことが私たちに、また教会にとって、決定的に大事です。―「主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです」。

[4]　主イエスの遺言である「主の晩餐」

この言葉を主は文字通りの遺言として残して下さいました。そうです、遺言です。遺言って大事ですよ。例えば相続の場合、何よりも優先されます。主の遺言。「これは、あなたがたのためのわたしの体である。…また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」。しかし遺言は、ある意味依怙贔屓が表れますが、イエス様は、人をえり好みするなどということは断じてありません。人間の愛は人を選びます。限界がある愛です。だから交わりが壊れるのです。けれどもイエス様の十字架の愛は、全く違います！今日の礼拝の招きの聖句はこうでした。ローマの信徒への手紙8:38～39。主の愛は、死よりも強いと言っています。「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリストイエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」。私たちは、どんな自己中心でしかない者であったとしても（そう、あの弟子たちのようであっても、そしてコリント教会の人達のようであっても）、絶対に神様の御手から引き離されることはないのだ、主があの十字架で、私たちの、神様への負い目を、全部身代わって死んで下さったからです！

主の晩餐は、主イエス様の、永遠の愛の招きです。ご自分の死と引き換えに、私たちをご自分のものとしたい、という切なる祈りです。ご自身ホストとなって、ご自身を献げる、とんでもないイエス様の思いが溢れている食卓です。制定文の中で、続く29節では、「主のからだをわきまえずに飲み食いする者は」とありますが、「主のからだ」は教会のことです。そこでの交わりは誰も差別されることがあってはなりません。イエス様が来て下さったからには、そういう時代は終わりを告げたのです。共に主の命を頂いて生きる群れ、そこを本当に主ご自身の命という“同じ釜の飯を食う”共同体とされ続けて行きたいと思います。悔い改めと感謝をもって主の食卓に与りましょう。お祈り致します。

神様、人を分け隔てする私たちをお許しください。あなたがどんな熱く、決死の思いでこの晩餐式を開こうとして下さったか、それを絶えず思い起こさせてください。そして、私たちはあの人この人と一緒に主の前に立つのです。あなたに赦された者として、互いに許し合い、支え合って、一緒に主の教会を作っていくことが出来ますよう、聖霊をお与え下さい。あなたの溢れる愛を感謝して、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。